

文部科学大臣賞

世界の扉を開くかぎ

下川町立下川中学校 2年 三浦 かな

私は小学生の頃、バランスに問題がありよく転んでいた。それを面白がるクラスメートが押したり引っぱったりしてまた転ぶ。それがみじめで、本当に悲しくて、私は学校に行けなくなった。母に学校に行きたくないことを伝えると、「学校は少しお休みして他の世界を見に行こう」といい、私をカナダに連れて行った。

カナダには驚くことがたくさんあった。車イスの人が一人で、四段の階段がある路面電車に乗ろうとしていた。どうやって上るのだろうか？不思議に思っていると、まわりにいた人達が車イスごともち上げ、電車に乗っているのが見えた。乗せ終わると、また各自の生活に戻って行く。エレベーターの無い地下鉄では、必ず誰かに「ベビーカーを運びましょうか？」と声をかけられる。カナダはバリアフリーの面では日本より遅れていたけれど、優しさでそれをカバーしていた。

ある日、フードバンクに連れていってもらった。そこでは、食料や温かい食事が無料で提供されていた。何より驚いたのは、お年寄りや身体の不自由な人がボランティアでたくさん働いていたことだった。

私たちが食事をしていると、ひとりのホームレス男性がテーブルにやってきて、手を差し出した。お金をちょうだいと言ってくるかもしれない。私はドキドキした。しかし、男性はにっこりと笑ってこう言った。「子どもは宝物だ。たくさん食べて大きくなりなさい。」彼の手の中にはチーズがあった。家もなく、お金もない彼は、ほんの少しの自分の食べ物をシェアしようとしたのだ。

私は今まで、障がいや理由に自分は助けられる側の人間だと思っていた。しかし、自分のできごとで社会に貢献しているカナダの人々に会い、自分にもできることがあることに気付いた。

日本に戻ってから私は、自分が社会に貢献できる方法を考えた。最初にやったのは、髪の毛を寄付したことだ。昔、私は髪を洗うのが苦手だった。でも髪に気をつけて寄付することが出来た。誰かのためになると思うと頑張れた。また、ライフジャケットを着用すると救命率が上がり命が守れることを知り、ライフジャケットレンタルステーションを作ることを決めた。ライフジャケットは高いので、姉妹でお金を貯めるのに2年間かかった。そしてこの夏、町長にお願いしてやっと設置することができた。

私のまわりの小さな世界も、この広い世界につながっている。私は違う世界を知って、自分を見つめ直すことができた。そして今その小さな世界が大きな社会につながっていることを感じている。この活動を通して、どんどん友達が増えていった。世界の扉を開くかぎは、自分の中にあった。